

2021. 5. 30 (日) マタイ25:1~13

「目を覚ましていなさい。あなたがたの主が来られるのがいつの日なのか、あなたがたは知らないのですから。」(24:42)、また「あなたがたも用心(用意)していなさい。人の子は思いがけない時に来るのです。」(24:44)から、そのとき「忠実で賢いしもべ」(24:45)であると主に認めていただけるしもべは幸いだといエスは言われました(24:46)。

そんな賢い主のしもべとは、主のみことばに従い主のみこころを行う者、主から命じられ委ねられた務めを聖霊の力によって地味に、喜びと感謝をもって忠実に果たす者でありました(先々週の説教より)。

そんな「賢い」(そしてその反対の「愚かな」)しもべの姿が改めて本日の聖書箇所に記載されています。

**25:1** そこで、天の御国は、それぞれともしびを持って花婿を迎えに出る、十人の娘にたとえることができます。

〈そこで〉は「そのとき」とも訳せるので、主イエスが再び来られるその日、その時、明らかになる〈天の御国〉すなわち神の御支配が、神の審判の様が、〈それぞれともしびを持って花婿を迎えに出る、十人の娘〉たちに対する〈主人〉(11,12)の態度に、彼女たちの身に起こることに〈たとえることができ〉るとイエスは言われるのです。

〈たとえ〉に言われているユダヤ人の婚礼は、婚約(これで法的には正式な夫婦となる)してからおよそ1年後に二人が一緒になって結婚生活を始めることを喜ぶ祝宴です。

〈花婿〉は自分の友に付き添われて夕方花嫁の家に来るのですが、花嫁もまた自分の付き添いの女性たちを伴って〈花婿〉が来るのを待ち、〈花婿〉が来て『さあ、花婿だ。迎えに出なさい』と叫ぶ声(6)が聞こえるとこの付き添いの女性が〈それぞれともしびを持って〉周りを照らして〈花婿を迎え〉て花嫁とともに〈花婿〉の家に行き(その途中にも〈ともしび〉が必要だったろう)、そこで祝宴が行われました。

そういう、花嫁の付き添いとして選ばれた女性たちが〈十人の娘〉でした。

その〈十人の娘〉によってたとえられているのは私たち一人一人であり、〈花婿〉にたとえられているのが再臨の主イエス・キリストです。

**25:2** そのうちの五人は愚かで、五人は賢かった。

**25:3** 愚かな娘たちは、ともしびは持っていたが、油を持って来ていなかった。

**25:4** 賢い娘たちは自分のともしびと一緒に、入れ物に油を入れて持っていた。

〈ともしび〉の器には一度には沢山の油が入らないため、長い時間火をともししておくためには別に予備の油を入れた器を備えて置く必要があります、〈入れ物〉とはそんな予備の油を入れた器のことです。

さてそして、〈愚か〉か〈賢い〉かの差、違いは「油を持って来ていなかった」か「入れ物に油を入れて持っていた」か、その〈用意〉にありました(〈ともしびと一緒に、入れ物に油を入れて持っていた〉娘たちは、〈用意ができていた娘たち〉(10)と言われます。

この違いがこの後、決定的な結末を自分たち自身に招くことになるのです。

25:5 花婿が来るのが遅くなったので、娘たちはみな眠くなり寝入ってしまった。

〈愚かな娘たち〉者も〈賢い娘たち〉もどちらの〈娘たちはみな眠くなり寝入ってしまった〉、それほど確かに〈花婿が来るのが遅くなった〉のでした。

しかしどんなに〈遅くなつ〉ても〈花婿〉は必ず来るのであり、そのとき花嫁に付き添い、花嫁にいわば属する、花嫁と一つの者たちの備えの如何(いかん)が問われるのです。

25:6 ところが夜中になって、『さあ、花婿だ。迎えに出なさい』と叫ぶ声がした。

25:7 そこで娘たちはみな起きて、自分のともしびを整えた。

25:8 愚かな娘たちは賢い娘たちに言った。『私たちのともしびが消えそうなので、あなたがたの油を分けてください。』

25:9 しかし、賢い娘たちは答えた。『いいえ、分けてあげるにはとても足りません。それより、店に行って自分の分を買ってください。』

25:10 そこで娘たちが買いに行くと、その間に花婿が来た。用意ができていた娘たちは彼と一緒に婚礼の祝宴に入り、戸が閉じられた。

25:11 その後で残りの娘たちも来て、『ご主人様、ご主人様、開けてください』と言った。

25:12 しかし、主人は答えた。『まことに、あなたがたに言います。私はあなたがたを知りません。』

25:13 ですから、目を覚ましていなさい。その日、その時をあなたがたは知らないのですから。

〈目を覚ましていなさい〉とは、このたとえでは娘たちがみな〈眠くなり寝入ってしまった〉(5)ことが悪かったと言われるのではないようです。

それは、まずどんなに遅くなつても必ず来る〈花婿〉を信じ続けなさい、〈イエスから、目を離さないでいなさい〉(ヘブル 12:2)ということです。

もし一時的に〈眠くなり寝入ってしまった〉としても〈起きて、自分のともしびを整え〉(7)て〈花婿〉を〈迎えに出〉て〈彼と一緒に婚礼の祝宴に入る〉(10)用意をしていなさい、ということです。

〈花婿〉を〈迎えに出〉て〈彼と一緒に婚礼の祝宴に入る〉ことを生涯の目標として〈信仰と希望と愛〉(I コリント 13:13)によって日々を生きることです。

そんなイエスへの〈信仰と希望と愛〉は他人から〈分けて〉もらうのではなく、私たち一人一人が〈自分の分〉として神のみことばと聖霊によって与えていただく一つまり、金を払わないで買う (cf. イザヤ 55:1) のです。

そんな〈賢い〉人は〈『さあ、花婿だ。迎えに出なさい』と叫ぶ声〉がするその時が来てからでは事が遅すぎることを知っている人、〈「私はあなたがたを知りません」〉(12)と言われる〈主人〉(すなわち神)と主の審判を正しく真剣に恐れる人です。

主イエスが再び来られるその日、その時に対する用意をしない〈愚か〉さに対する当然の結末を真剣に正しく恐れて、〈天の御国〉の〈戸が閉じられ〉る前に、〈『さあ、花婿だ。迎えに出なさい』と叫ぶ声〉を聞くまでの間に、〈その日、その時を…知らない〉(13)私たちは自分自身を省みて用意をするほかない、そう恐れさせられ、励まされているのです。